

スタートアップ深層 ～ 世界が注目する理由に迫る ～


 Unlimited Robotics

オール・イン・ワンの
サービスロボットを開発



バルーン型の
ビデオ通話ロボットを開発

毎年多くのスタートアップ企業が誕生するイスラエル。革新的な技術やプロダクトを生み出し、世界から注目を集めているスタートアップの中から、今回、Unlimited Robotics と zeppi の2社に、創業過程や事業戦略、今後の展望、さらには日本市場への思いや本音を聞いた。


1.

Unlimited Robotics

Mr. Guy Altager

CEO

オール・イン・ワンの家事代行ロボット「Gary」

近年、多くのロボットが開発されており、ロボット掃除機などの家事代行ロボットを導入する家庭も多い。それらのほとんどは、掃除など特定の機能に特化したものであり、片付けや荷物の運搬、その他のあらゆる機能を同時に
 Unlimited Robotics
 行うことはできない。

一方で、Unlimited Robotics 社は、アプリをインストールすることで、掃除や荷物の運搬、花の水やりなどの様々な動作ができるオールインワンロボット「Gary」を開発している。

同社の CEO である Guy Altager 氏に取材を行った。

「ロボット用アプリストア」通して様々な機能を獲得

多くのロボットと異なり、Gary はある意味「白紙状態」で家や会社に届く。はじめは何もできないが、位置を教える動作にフィードバックを与えたり、専用のアプリストアから機能をダウンロードすることで、機能を増やすことが可能だ。フィードバックにより得られたデータは、プライバシーを保った上でデバイス間で共有され、より効率的な動作に役立てられる。

JETRO

Japan External Trade Organization

右が、実際の Gary の画像である。

大きさはおよそ 140cm で、重さは約 40kg、秒速 1.5m で進むことができ、赤外線カメラを含むカメラや、その他様々なセンサーを内蔵している。Gary という名前は、Altager 氏の子供達の名前の頭文字に由来している。

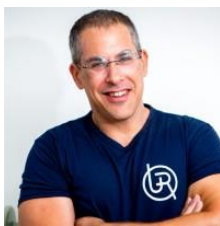


ロボット用ソフトウェア開発のサポートも行う

同社は、ロボティクス専門のソフトウェア開発を学んでいなくても、プログラマーがアプリを開発できる仕組みを作っている。例えば、ロボット用ソフトウェア開発で一般的に用いられているプログラミング言語である C 言語や C++ の経験がなく、python 等の言語でコードを書いたとしても、ロボット用にコードを「翻訳」し、動作させることが可能だ。ロボット用ソフトウェア開発の障壁を低くすることにより、多くのアプリが開発されることを目指している。

ロボットと人間が共存する社会を目指す

同社は、あらゆる家庭や、医療機関、介護施設、レストランなどで Gary が用いられ、人々が自由な時間を増やしたり、深刻な人手不足を解消することを目指している。同社の製品は 2022 年春に販売予定だ。



Guy Altager 氏

CEO から日本企業に向けたメッセージ

日本はロボット産業が盛んであり、私たちは日本市場に非常に興味をもっています。日本で製品を展開するにあたり、当社はパートナー企業を探しております。

<https://www.unlimited-robotics.com/>

2.

Zeppi

Mr. Eitan Lavie

CEO

バルーン型のビデオ通話ロボット「zeppi」

zoom等のビデオ通話によりオンラインでの会議が可能になったものの、人々が動き回るイベントやワークショップ等でのオンラインコミュニケーションは難しい。また、対面でのコミュニケーションに比べ「つながり」を感じるのも困難である。

zeppi社は、バルーン型の移動式ビデオ通話ロボットを開発しており、対面であるかのようなオンラインコミュニケーションを可能にする。



同社のCEOであるEitan Lavie氏に取材を行った。

娘のヘリウム風船から着想を得て、開発に至る

同社のアイデアは、Lavie氏の娘が持っていたヘリウム風船に由来する。

3年前、Lavie氏は、妻と子供とカナダに居住していた。その際、イスラエルにいる両親とiPadでビデオ通話をしながら、家中を動き回る子供たちの様子を映し出すことで「一緒にいる感覚」を作り出そうと試みていた。

ある日、娘が誕生日にもらったヘリウム風船のガスが抜け、目の前で浮かんでいるのを見た際に「この上にiPadを置けたら非常に面白い」と思い、開発を志した。

Lavie氏は、イスラエル空軍等において航空宇宙工学の経験を積んでおり、機械を飛行させる方法、また、それらを遠隔操作する方法等についての理解が深く、この経験が現在につながっていると語っている。

浮遊し、移動する風船に映像が映し出される

同社が開発中の製品は、ビデオ通話において必要となるディスプレイ、カメラ、マイク、スピーカーを有するヘリウム風船のようなもので、自動的にホバリングすることができ、また遠隔操作することも可能だ。

ヘリウムガスで浮遊しているため、ドローンのように大きな音を出したり、浮遊のためのエネルギーを必要としないことが同社の製品の特徴だ。



Zeppi社が開発中の製品

風船に投影された映像を見て、立ち歩きながらビデオ通話ができるだけでなく、風船を遠隔操作して遠くの人とコミュニケーションをとることもできる。

日本への製品展開も目指している

同社は現在もプロトタイプをアップグレードし続けており、ハードウェア企業としては珍しく 2-3 週間という早いペースで潜在的な顧客や投資家に対してデモンストレーションを行なっている。まずはイベント等での製品提供を目指し、その後はオフィスや家庭にシステムを設置することも視野に入れている。

同社は、今後半年間は PoC を繰り返し、実用最小限の製品が製作でき次第、日本を含む世界中の市場への製品展開を目指す予定だ。日本へ製品を展開するにあたり、イベントや企業にコミュニケーションツールを提供する企業と提携したいと Lavie 氏は語る。



Eitan Lavie 氏

CEO から日本企業に向けたメッセージ

私は以前日本に行ったことがあり、日本の文化だけでなく、日本の方々とビジネスをするのが非常に好きで、日本への製品展開をしたいと考えています。そのためには、日本のパートナーとともに仕事をするのが唯一の方法だと考えており、当社と提携できる企業を探しております。

<https://www.myzeppi.com/>